

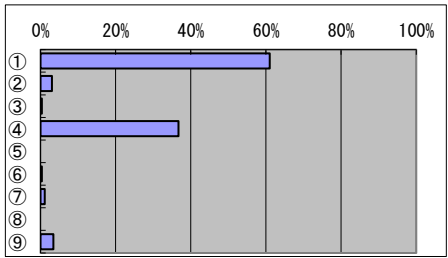
「家庭科教育の在り方及び実施状況」に関するアンケート調査結果

全ての課程・学科
n=264

1 実施科目について

(1) 実施している共通教科「家庭」の科目名及び単位数

① 家庭基礎(2単位)	① 161	61.0%
② 家庭基礎(3単位)	② 8	3.0%
③ 家庭総合(3単位)	③ 1	0.4%
④ 家庭総合(4単位)	④ 97	36.7%
⑤ 家庭総合(5単位)	⑤ 0	0.0%
⑥ 生活デザイン(3単位)	⑥ 1	0.4%
⑦ 生活デザイン(4単位)	⑦ 3	1.1%
⑧ 生活デザイン(5単位)	⑧ 0	0.0%
⑨ その他	⑨ 9	3.4%



その他⑨の記述：・家庭総合6単位(3校)
・家庭総合4単位のうち1単位を小児看護で代替(1校)
・家庭基礎2単位が設定されているが、現在は研究指定校のため、特例措置として年間20時間程度実施。
・一般コースでは2年生から3年生で家庭総合4単位、文理クラスでは2年生の1年間家庭基礎2単位(1校)
・今年度から家庭総合4単位となり、家庭基礎2単位は現2学年の履修で終了

【結果】

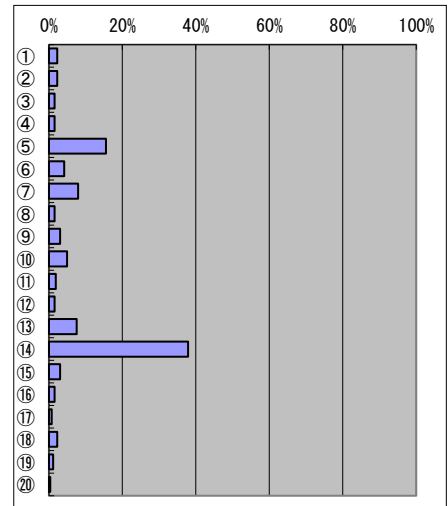
- (a)「家庭基礎」2単位実施校(学科)が6割を越え、「家庭総合」4単位実施校が4割弱となった。
(b)「家庭基礎」2単位実施については、学科別では総合学科で84.6%、学級数別では中規模校(13～18学級)で82.1%、大規模校(19学級以上)で78.6%となり、中～大規模校での実施率が高い。
(c)「家庭総合」4単位実施については、課程別では全日制で34.2%であるのに対して、定時制、通信制で57.6%と割合が高く、学科別では家庭に関する学科(60%)が最も高く、学級数別での小規模校(1～6学級)で57.8%と実施率が高い。
(d)「家庭基礎」を増単して「家庭基礎」3単位を実施している学校(学科)は、すべて職業学科8学科(工業5、農業2、商業1)であった。

【分析・考察】

- (a)平成18年度、平成19年度の道教委調査時には「家庭基礎」2単位実施校が全体の約4割、「家庭総合」4単位実施校が全体の約6割を占めていたが、今調査により約10年を経て、その割合が反転したことが分かった。
(b)平成28年度高校教科書採択状況(文部科学省)においては、「家庭基礎」77.1%(前年比0.5ポイント増)、「家庭総合」22.3%(同0.4ポイント減)となり、「家庭基礎」の比率が高まっている。しかし、全国と比較すると、「家庭基礎」の比率は低い状況である。
(c)「家庭基礎」増単(3単位)については、就職等で親元を離れ独立する生徒を想定し、生活の自立のための教科・科目として位置付け、生活に必要な基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指し実施しているものと思われる。

(2) 実施している専門教科「家庭」の科目名

① 生活産業基礎	① 6	2.3%
② 課題研究	② 6	2.3%
③ 生活産業情報	③ 4	1.5%
④ 消費生活	④ 4	1.5%
⑤ 子どもの発達と保育	⑤ 41	15.5%
⑥ 子ども文化	⑥ 11	4.2%
⑦ 生活と福祉	⑦ 21	8.0%
⑧ リビングデザイン	⑧ 4	1.5%
⑨ 服飾文化	⑨ 8	3.0%
⑩ ファッション造形基礎	⑩ 13	4.9%
⑪ ファッション造形	⑪ 5	1.9%
⑫ ファッションデザイン	⑫ 4	1.5%
⑬ 服飾手芸	⑬ 20	7.6%
⑭ フードデザイン	⑭ 100	37.9%
⑮ 食文化	⑮ 8	3.0%
⑯ 調理	⑯ 4	1.5%
⑰ 栄養	⑰ 2	0.8%
⑱ 食品	⑱ 6	2.3%
⑲ 食品衛生	⑲ 3	1.1%
⑳ 公衆衛生	⑳ 1	0.4%



【結果】

- (a)全体で最も割合が高かったのが「フードデザイン」で全体の約40%を占め、学科別では総合学科においては84.6%で最も高く、学級数別では小規模校(1～6学級)で56.7%と高いが規模が大きくなるに従い漸減する。定時制・通信制課程においても33.3%の実施率となっており最も実施率の高い科目である。
(b)2番目に割合が高かったのが「子どもの発達と保育」で全体の15.5%を占め、学科別では総合学科においては46.2%で最も高く、学級数別では小規模校(1～6学級)で23.3%と高いが規模が大きくなるに従い漸減する。定時制・通信制課程においても13.3%の実施率となっており2番目に高い科目である。
(c)3番目に割合が高かったのが「生活と福祉」8%で、続いて「服飾手芸」7.6%となった。

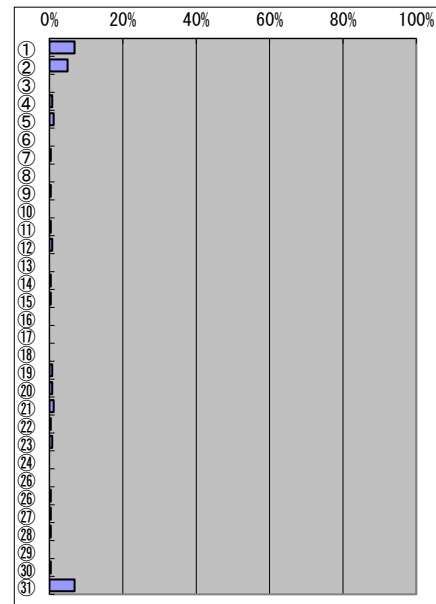
【分析・考察】

- (a)教育課程の弾力化・多様化が進み、普通科においても、総合学科や単位制等のように共通教科の単位数を最小に、かつ、できるだけ多くの選択科目において生徒の多様なニーズや進路に対応している各学校(学科)の状況がうかがえる。
(b)「フードデザイン」以外の食に関する科目や、「服飾手芸」以外の衣に関する科目は、家庭に関する学科や調理師養成系学科で実施する傾向がある。
(c)学習指導要領において普通科等で履修することが考えられる職業科目として、「フードデザイン」「子どもの発達と保育」「生活と福祉」を含む7科目が示されている。左記科目のほかに「消費生活」「子ども文化」「リビングデザイン」「ファッション造形基礎」となっているが、「消費生活」「リビングデザイン」の実施率は低い状況にある。

(3) 開設している学校設定科目名

- ① 生活教養
- ② ライフデザイン
- ③ 生活科学
- ④ 生活文化
- ⑤ 生活と地域
- ⑥ 生活福祉基礎
- ⑦ 生活福祉デザイン
- ⑧ 生活福祉実習
- ⑨ 生活福祉援助技術
- ⑩ 福祉コミュニケーション
- ⑪ 被服構成
- ⑫ 被服技術と理論
- ⑬ 手芸
- ⑭ 子どもの言語表現
- ⑮ 音楽リズム
- ⑯ 調理理論
- ⑰ 調理基礎
- ⑱ 調理実習
- ⑲ 食物
- ⑳ くらしと食物
- ㉑ 食物研究
- ㉒ 食文化研究
- ㉓ 調理研究
- ㉔ 食文化概論
- ㉕ 食文化とマナー
- ㉖ 保育介護基礎
- ㉗ 染織制作
- ㉘ 染物と織物
- ㉙ 羊と織物
- ㉚ 色彩とデザイン
- ㉛ その他

①	18	6.8%
②	13	4.9%
③	0	0.0%
④	2	0.8%
⑤	3	1.1%
⑥	0	0.0%
⑦	1	0.4%
⑧	0	0.0%
⑨	1	0.4%
⑩	0	0.0%
⑪	1	0.4%
⑫	2	0.8%
⑬	0	0.0%
⑭	1	0.4%
⑮	1	0.4%
⑯	0	0.0%
⑰	0	0.0%
⑱	0	0.0%
⑲	2	0.8%
⑳	2	0.8%
㉑	3	1.1%
㉒	1	0.4%
㉓	2	0.8%
㉔	0	0.0%
㉕	0	0.0%
㉖	1	0.4%
㉗	1	0.4%
㉘	1	0.4%
㉙	0	0.0%
㉚	1	0.4%
㉛	18	6.8%



その他㉛の記述：ライフサイエンスB、地域開発と食、食文化とマナー、福祉と手話Ⅰ、福祉と手話Ⅱ、福祉コミュニケーション、生活と福祉(3校)、生活学、食物デザイン、子どもの発達と保育、農業農村ライフ、形態別介護技術、調理理論、食文化概論、調理実習、栄養学、食物実践、生活設計、家庭科演習、総合表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ(フードクッキング)、食育、ライフプランニング

【結果】

(a)実施率が高いのが「生活教養」(6.8%)、「ライフデザイン」(4.9%)であり、2科目とも普通科と総合学科でのみ実施している。

【分析・考察】

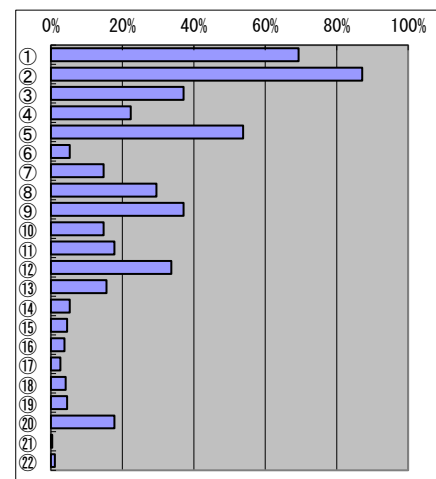
(a)「生活教養」や「ライフデザイン」については、食や衣など特定の分野を限定されずに広く指導ができる汎用性が高いという観点から、設定したと思われる。

2 指導内容について

(1) 家庭科教育の実践を通して、生徒に特に身に付けさせたい資質・能力(5つまで)

- ① 衣食住の実践力
- ② 生活の自立能力
- ③ 生活を改善する力
- ④ 生活を創造する力
- ⑤ 他者と協働する力
- ⑥ 地域を見直す力
- ⑦ 地域に貢献する力
- ⑧ 課題を発見し解決する力
- ⑨ 主体的に生活する力
- ⑩ 生活を科学的に探究する力
- ⑪ 生涯生活設計力
- ⑫ コミュニケーション能力
- ⑬ 意思決定能力
- ⑭ 危機(リスク)管理能力
- ⑮ 情報活用能力
- ⑯ 批判的思考力
- ⑰ 論理的思考力
- ⑱ 創造的思考力
- ⑲ 合理的判断力
- ⑳ 自己表現力
- ㉑ マネジメント能力
- ㉒ その他

①	183	69.3%
②	230	87.1%
③	98	37.1%
④	59	22.3%
⑤	142	53.8%
⑥	14	5.3%
⑦	39	14.8%
⑧	78	29.5%
⑨	98	37.1%
⑩	39	14.8%
⑪	47	17.8%
⑫	89	33.7%
⑬	41	15.5%
⑭	14	5.3%
⑮	12	4.5%
⑯	10	3.8%
⑰	7	2.7%
⑱	11	4.2%
⑲	12	4.5%
⑳	47	17.8%
㉑	1	0.4%
㉒	3	1.1%



その他㉒の記述：言葉遣い、四則計算、慣習・習俗の理解と活用、社会に必要な力を身に付けさせられるような実践力、根拠に基づいた生活力、プレゼンテーション能力、生徒一人一人の潜在能力、人から愛されるという実感がわかる資質

【結果】

(a)全体で最も割合が高かったのが、「生活の自立能力」で9割弱(87.1%)で、定時制・通信制課程では96.7%とさらに高く、学科別では普通科で84.9%、専門学科(理数、外国語)(100%)、職業学科(86.2%)、総合学科(92.3%)となった。

(b)2番目に割合が高かったのが「衣食住の実践力」が7割弱(69.3%)で、特に学科別では職業学科で75.4%で、また定時制・通信制課程で73.3%と割合が高かった。

(c)3番目が「他者と協働する力」で5割強(53.8%)となり、特に小規模校(1~6学級)で65.6%と割合が高かった。

(d)4番目に「生活を改善する力」(37.1%)と「主体的に生活する力」(37.1%)となり、6番目に「コミュニケーション能力」(33.7%)となった。

【分析・考察】

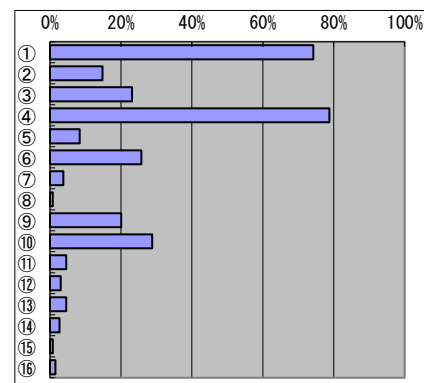
(a)上記の結果から、生徒自身が現在及び将来の生活を自立的に営み実践していく力を身に付けさせることを最優先として考え、自校の家庭科教育に取り組んでいることがうかがえる。

(b)生徒個々の自立を支える資質能力の育成のほかに、めまぐるしく変化する社会を背景とした時代の要請に応じて、他者と協働することやそれに必要なコミュニケーション能力の育成を図ることの大切さも踏まえ、実践していると思われる。

(2) 生徒に対して、特に重点を置いて実践している家庭科教育の内容(3つ)

- ① 生活の自立と生活の改善
- ② 家庭を築くことの重要性
- ③ 生涯生活設計・経済計画
- ④ 衣食住等に係る知識・技能の習得及び実践
- ⑤ 高齢者理解・支援する行動力
- ⑥ 子育て理解
- ⑦ 環境教育
- ⑧ 防災教育
- ⑨ 消費者教育
- ⑩ 食育の推進
- ⑪ 生活文化の伝承
- ⑫ シチズンシップ(市民性)教育
- ⑬ 男女共同参画社会の推進
- ⑭ ホームプロジェクト
- ⑮ 学校家庭クラブ活動
- ⑯ その他

①	196	74.2%
②	39	14.8%
③	61	23.1%
④	208	78.8%
⑤	22	8.3%
⑥	68	25.8%
⑦	10	3.8%
⑧	2	0.8%
⑨	53	20.1%
⑩	76	28.8%
⑪	12	4.5%
⑫	8	3.0%
⑬	12	4.5%
⑭	7	2.7%
⑮	2	0.8%
⑯	4	1.5%



その他⑯の記述: 看護や介護など、福祉に関する知識と実践、家庭科の分野を利用し授業を聴く姿勢、地産地消、地域交流学習

【結果】

(a)全体で最も割合が高かったのが、「衣食住等に係る知識・技能の習得及び実践」で約8割(78.8%)となり、特に職業学科(80.0%)、総合学科(84.6%)、定時制・通信制課程(86.7%)と高くなっている。
 (b)2番目に割合が高かったのが、「生活の自立と生活の改善」で約7割強(74.2%)で、3番目が「食育の推進」(28.8%)、続いて「子育て理解」(25.8%)、「生涯生活設計・経済計画」(23.1%)、「消費者教育」(20.1%)となった。

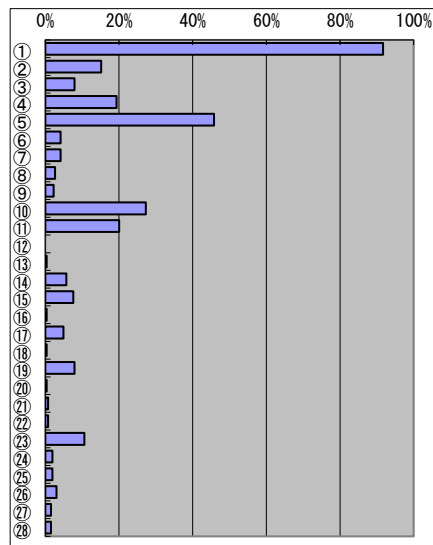
【分析・考察】

(a)生活の自立を図る上で必要な衣食住等の生活に関する基礎的・基本的な知識・技術の習得と実践的な態度の育成を最も重要視し、さらに生活の自立とともに生活の充実向上を目指した生活の改善が分野に限定せず、実施していることが分かる。
 (b)社会が大きく変化する中、社会からの要請として挙げられた課題の中でも、食習慣の乱れや生活習慣病の増加などへの対応として食育、少子高齢化への対応としての子育て理解、高齢者を中心とした金銭詐欺やネットトラブルなどへの対応として消費者教育など、自校の生徒の実態を踏まえつつ、自立した生活者を育成する教科として家庭科教育の役割を自覚し、取り組んでいると思われる。

(3) 生徒に対して、上記(1)の資質・能力を育成するために、特に創意・工夫している、または教育的効果があったと思われる学習・指導方法(3つ)

- ① 実験・実習
- ② 観察・まとめ
- ③ ICTの活用
- ④ グループ討議
- ⑤ グループワーク
- ⑥ ディベート
- ⑦ ロールプレイング
- ⑧ プレゼンテーション
- ⑨ 成果発表
- ⑩ 作品制作・発表
- ⑪ レポート作成・発表
- ⑫ 中高連携
- ⑬ 高大連携
- ⑭ 社会人講師講話
- ⑮ 地域社会連携
- ⑯ 企業連携
- ⑰ 異世代交流
- ⑱ 施設見学
- ⑲ 施設訪問
- ⑳ 就業体験
- ㉑ 発見学習
- ㉒ 調査研究学習
- ㉓ 問題解決学習
- ㉔ 商品開発・企画
- ㉕ 事例研究
- ㉖ ホームプロジェクト
- ㉗ 学校家庭クラブ活動
- ㉘ その他

①	242	91.7%
②	40	15.2%
③	21	8.0%
④	51	19.3%
⑤	121	45.8%
⑥	11	4.2%
⑦	11	4.2%
⑧	7	2.7%
⑨	6	2.3%
⑩	72	27.3%
⑪	53	20.1%
⑫	0	0.0%
⑬	1	0.4%
⑭	15	5.7%
⑮	20	7.6%
⑯	1	0.4%
⑰	13	4.9%
⑱	1	0.4%
⑲	21	8.0%
⑳	1	0.4%
㉑	2	0.8%
㉒	2	0.8%
㉓	28	10.6%
㉔	5	1.9%
㉕	5	1.9%
㉖	8	3.0%
㉗	4	1.5%
㉘	4	1.5%



その他㉘の記述: 時事問題の提示、異世代交流を通じた課題解決のためのインシデントプロセス、家族家庭のところで、家族ドラマの作成・発表、施設訪問はこれから実施

【結果】

(a)最も割合が高かったのが「実験・実習」(91.7%)で9割以上を占め、学科別では普通科(93.4%)、専門学科(100%)、職業学科(92.3%)、総合学科(69.2%)となった。
 (b)2番目に割合が高かったのが「グループワーク」で約5割弱(45.8%)となり、3番目が「作品制作・発表」(27.3%)で、続いて「レポート作成・発表」(20.1%)、「グループ討議」(19.3%)、「観察・まとめ」(15.2%)となった。
 (c)3番目の「作品制作・発表」については、特に定時制・通信制課程(50.0%)、職業学科(30.8%)、総合学科(30.8%)で割合が高く、4番目の「レポート作成・発表」については、特に総合学科(38.5%)で割合が高かった。
 (d)総合学科においては、他学科が「実験・実習」が9割以上を占める中、「社会人講師講話」(23.1%)、「異世代交流」(23.1%)の割合も他学科に比べ高かった。

【分析・考察】

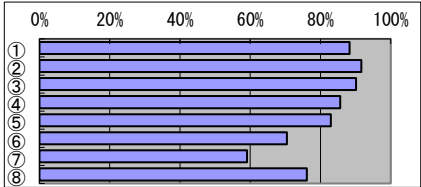
(a)従来から家庭科においては、10分の5以上を実験・実習に配当するよう定められてきたが、それを踏まえ、実践しているのが分かる。また、それらの「実験・実習」には調査・研究、観察・見学、就業体験、乳幼児や高齢者との触れ合いや交流活動などの学習活動も含まれ、様々な活動を網羅している内容として回答したと思われる。
 (b)全体で約半数の学校(学科)が、「グループワーク」を教育効果の高い学習活動として挙げ、さらに「グループ討議」に限定した項目においても、2割近くの学校が効果的と回答し、言語活動の充実への取組も推進されていることがうかがえる。

3 「ホームプロジェクト」及び「学校家庭クラブ活動」について

(1) 「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」に関することから知っていること(すべて選択)

- ① 学習指導要領では、必修科目「家庭基礎」「家庭総合」「生活デザイン」のいずれにおいても、指導すべき項目として位置付けられている。
- ② 「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」のどちらも、主体的に課題を見出すという課題の発見と解決に向けた問題解決的学習活動である。
- ③ 「ホームプロジェクト」の指導に当たっては、学習内容を各自の家庭生活と結び付けて考えさせ、常に課題意識を持たせるようにして題目を選択させる。
- ④ 「ホームプロジェクト」は、計画、実行、反省・評価の流れに基づいて行い、実施後は、次の課題につなげるとともに、成果の発表会を行うものとする。
- ⑤ 「ホームプロジェクト」は、家庭生活の課題を解決するために個人で行う研究・実践活動であり、「学校家庭クラブ活動」は、学校生活や地域社会の課題をグループや学校単位で改善・解決を目指し、活動する学習である。
- ⑥ 学校家庭クラブ連盟は、「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」を支援し、生徒の活動成果を発表する大会を主催したり、クラブ員同士の情報交換や交流ができるよう企画したりする任意の団体である。
- ⑦ 学校家庭クラブ連盟に加入するには、生徒は何人からでも加入できる。
- ⑧ 北海道では、毎年、全道家庭クラブ連盟研究発表大会を開催し、「ホームプロジェクトの部」と「学校家庭クラブ活動の部」において、全国への代表者を選出している。

①	233	88.3%
②	242	91.7%
③	238	90.2%
④	226	85.6%
⑤	219	83.0%
⑥	186	70.5%
⑦	156	59.1%
⑧	201	76.1%



【結果】

- (a)学習指導要領での位置付けについての認識は高い(88.3%)。
- (b)「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」のどちらも課題発見、問題解決的学習と認識され、また認知の割合も9割以上を占めている。(②91.7%、③90.2%)
- (c)家庭クラブ連盟の組織や具体的な加入方法などについては、他の事項に比べやや理解度が低い状況にある。(⑥70.5%、⑦59.1%)

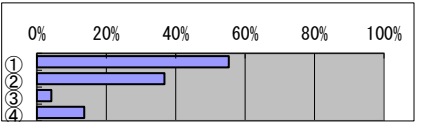
【分析・考察】

- (a)「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」のねらいや意義については、理解がされていることから、授業実践ができる環境整備(時間の確保、指導事例や具体的指導方法等の提供)が必要である。
- (b)学校家庭クラブ連盟加盟の可否とは関わりなく、学習内容として学校家庭クラブ活動が必修事項であること、学校家庭クラブ連盟につき、加入は任意であること、生徒は何名からでも加入できるなど、具体的な場面を想定して周知する必要がある。

(2) 「ホームプロジェクト」の指導の場面(複数選択可)

- ① 授業中
- ② 長期休業中
- ③ 放課後
- ④ その他

①	146	55.3%
②	97	36.7%
③	11	4.2%
④	36	13.6%

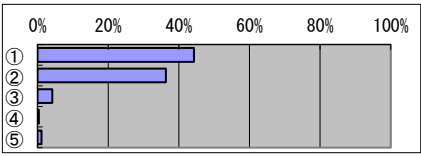


その他④の記述: ・今年度まだ実施していない ・昼休み ・各单元の中の家庭での取り組みとして実施 ・今後実施予定 ・このような活動があるということにふれ紹介 ・長期休業中に家庭で調理をする課題を実施 ・事前指導後、長期休業中の課題として取り組ませ、優れた内容については、授業の中で紹介 ・1学年:衣生活を確立・改善、2学年:1日の食事を全て書き、感想・改善、地域に見合った創作料理を立案・調理

ア 「ホームプロジェクト」の総指導時間

- ① 0~1単位時間
- ② 2~5単位時間
- ③ 6~10単位時間
- ④ 11~15単位時間
- ⑤ 16単位時間以上

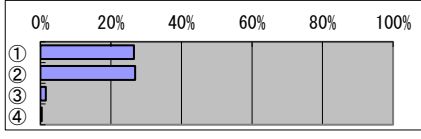
①	117	44.3%
②	96	36.4%
③	11	4.2%
④	1	0.4%
⑤	3	1.1%



イ 「ホームプロジェクト」の授業中の年間指導時間(配当単位時間)

- ① 0~1単位時間
- ② 2~5単位時間
- ③ 6~10単位時間
- ④ 11単位時間以上

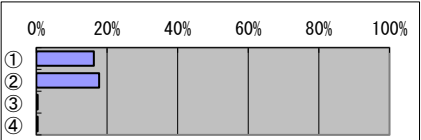
①	70	26.5%
②	71	26.9%
③	4	1.5%
④	1	0.4%



ウ 「ホームプロジェクト」の長期休業中の年間指導時間

- ① 0~1単位時間
- ② 2~5単位時間
- ③ 6~10単位時間
- ④ 11単位時間以上

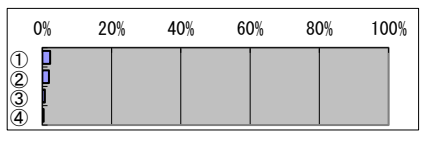
①	43	16.3%
②	47	17.8%
③	1	0.4%
④	1	0.4%



エ 「ホームプロジェクト」の放課後の年間指導時間

- ① 0~1単位時間
- ② 2~5単位時間
- ③ 6~10単位時間
- ④ 11単位時間以上

①	6	2.3%
②	5	1.9%
③	2	0.8%
④	1	0.4%

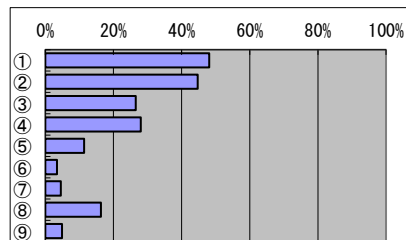


【結果】

- (a)指導の場面は半数以上が授業時間であると回答しており(55.3%)、さらに長期休業中を活用している学校も少なくない(36.4%)。
 - (b)放課後を活用しての指導(4.2%)については、かなり低い。
 - (c)「ホームプロジェクト」の総指導時間数が0~1単位時間である学校が4割を越え(44.3%)、全体でみると、長期休業中を活用しても十分に時間が確保されていない。
- 【分析・考察】
- (a)実施時間から想定すると、紹介のみで終わらせている。もしくは授業においては、「ホームプロジェクト」の学習の概要等(課題の発見、計画、実行、評価、改善)を説明し、長期休業中や家庭学習(個人の取組)となり、宿題として提出させている学校(学科)も多いのではないと思われる。

(3) 「ホームプロジェクト」を指導した中で、特に教育的効果があったと思われるもの(3つまで)

① 生活(家庭)を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた。	① 127 48.1%
② 学習内容と各自の生活を関連付けられる力(結び付けられる力)が身に付いた。	② 118 44.7%
③ 生活(家庭)を改善する力や創意工夫する力が身に付いた。	③ 70 26.5%
④ 生活(家庭)を改善しようとする実践的態度が身に付いた。	④ 74 28.0%
⑤ 自主性や積極性が身に付いた。(発揮している)	⑤ 30 11.4%
⑥ 協調性(協働性)が身に付いた。(発揮している)	⑥ 9 3.4%
⑦ コミュニケーション能力が身に付いた。(向上した)	⑦ 12 4.5%
⑧ 発表力(表現力)やまとめる力が身に付いた。(発揮している)	⑧ 43 16.3%
⑨ その他	⑨ 13 4.9%



その他⑨の記述: ・今年度まだ実施していないため、効果が期待されるものを選択 ・今後予定のため回答なし ・自分、家族の生活の改善点を改めて考えることができた。 ・発表を行っていないため、個人の技術の向上が成果である。 ・指導時間が多くないこともあり、特に効果を感じていない。 ・分からない

【結果】

(a)教育効果として割合が高かったのが、「生活(家庭)を見直す力(課題を発見する力)」(48.1%)、「学習内容と生活を関連付けられる力」(44.7%)となった。

(b)「生活を改善する力や実践的態度が身に付いた」という回答も3割弱あげられた。

【分析・考察】

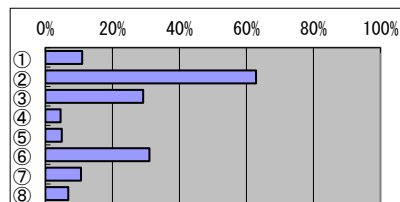
(a)これらの活動から生活を見直す力や学んだ学習内容と各自の生活を結び付け学びを実生活に生かす力や実践的態度の育成など、教育的な効果を感じている教員がいる一方で、未実施と回答したところや、指導時間が多くないことから効果を感じていない、発表を行っていないなどの回答もあり、生徒のレポート等の提出などで終了させ、教育効果が感じられない、分からないという記述もあった。

(b)教員自身が家庭科教育の中で、ホームプロジェクトの学習経験がないことも推測され、教育効果を感じられないという認識がある。

(c)未実施のため、もしくは家庭クラブ連盟へは非加盟であるため回答できないという記載も多くあり、連盟加盟と関わりなく家庭科の必修教科目の3科目の全てにおいて必須な指導事項である認識が十分ではないと思われる。

(4) 「ホームプロジェクト」を指導した中で、特に問題と捉えているもの(全て選択)

① 指導の手順や方法が分からない面がある。	① 29 11.0%
② 生徒の学習時間・活動時間の確保が難しい。	② 166 62.9%
③ 指導に伴う時間(教員側)の確保が難しい。	③ 77 29.2%
④ 保護者や地域の方々との理解や協力が得られにくい。	④ 12 4.5%
⑤ 校内における他教科や他教員の理解や協力が得られにくい。	⑤ 13 4.9%
⑥ 生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動にすることが難しい。	⑥ 82 31.1%
⑦ 指導や活動に関わる費用の捻出に苦慮している。	⑦ 28 10.6%
⑧ その他	⑧ 18 6.8%



その他⑧の記述: ・今年度まだ実施していないので、分からない ・専任教員がいないため、指導が困難である。
・生活の基盤が成り立っていない家庭が多い。 ・個人情報の管理 ・全員同じテーマで行っているため、個々の違う課題を解決するまでには至っていない。
・生徒の家庭環境(全校生徒の約40%が児童養護施設より通学)
・商業科の授業で『課題研究』という科目を2単位実施しており、家庭科の授業での実施は1~2時間である。
・上記⑥について、一部の生徒に見られる。 ・本校の総合的な学習などで課題解決学習をしているので、家庭科として特に力を入れていない。 ・生活を改善する課題を探し出せず、薄い内容になりがちな生徒への助言・対応。
・生徒の学力差が大きく、進め方が難しい。 ・基礎科目の内容がある程度終了してから行おうと考えていたため、十分な指導時間がとれず、紹介で終わった。

【結果】

(a)特に問題と捉えている理由として、「生徒の学習時間・活動時間の確保が難しい」(62.9%)が最も割合が高く、また逆に、「教員側の指導に伴う時間の確保が難しい」(29.2%)という回答も多くあり、指導に当てる時間の確保ができない、時間の余裕がないという回答が圧倒的に多かった。

(b)理由の2番目に挙げられているものとして、「生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動にすることが難しい」(31.1%)という回答も割合として高かった。

(c)「指導の手順や方法が分からない面がある」(11.0%)と回答した割合も、決して低いとは言えず、見過ごせない状況である。

【分析・考察】

(a)時間の確保が大きな問題といえる。

(b)基礎的な知識・技術の習得に時間がとられ、既習事項を活用する、もしくは実生活でやってみるということが、応用的・発展的な学習と捉えられ、基礎基本の習得終了後に実施予定し、導入できていないケースも多いと予想される。

(c)基礎基本の習得を図る段階で授業の振り返りや生徒同士で学んだことを確認し合う活動、さらに普段から生徒が主体となった場面(書く、話す、発表する)を意図的に取り入れるなどして、段階的に問題解決型授業を展開するなど工夫改善が必要である。アクティブ・ラーニングの学習方法として、高次元なレベルである問題解決学習に対して、比較的、レベルの低い知識定着を目的としたまとめ・小レポート作成、話し合い、プレゼンテーションなど演習や実習を徐々に取り入れるなどのステップを踏まずに最後に取り入れようとしても生徒にとっては、急激に高いハードルの学習となり、学習効果が得られにくくなると思われる。

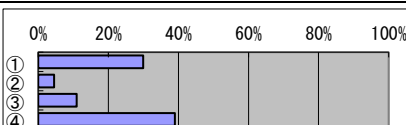
(d)課題発見が自主的に行えない場合は、数人で話し合わせたり、教師が相談に乗って課題に気づかせる支援をするなど、ステップ毎に実現状況の確認が必要である。

(e)学習指導要領を再度確認の上、科目の指導内容の精選も必要である。たとえば現行学習指導要領上では「家庭基礎」の指導内容に被服製作は位置付けられていないが、実施している学校(学科)も多いのが現状である。

(f)指導内容精選の上で、特に「家庭基礎」実施校においては、効率のよい指導方法や、生徒が興味関心をもつ指導内容の工夫改善が必要であり、それに資する実践事例の提示や、自校で取り入れやすいワークシートや評価シート等の指導資料提供なども効果的と考える。

(5) 「学校家庭クラブ活動」の指導の場面(複数選択可)

① 授業中	① 79 29.9%
② 長期休業中	② 12 4.5%
③ 放課後	③ 29 11.0%
④ その他	④ 103 39.0%

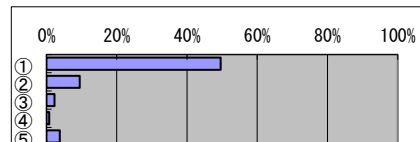


その他④の記述: ・今年度まだ実施していない ・内容紹介のみ ・学校休業日に、学校外で活動を行う。 ・農業クラブ活動(水産クラブ)の指導内において、家庭クラブ等の学科クラブについて学ぶ ・一日体験入学などの学校行事の際の補助活動 ・学校祭バザーでのマドレーヌ販売、お菓子講習会の開催 ・今年度「学校家庭クラブ同好会」として部活動を立ち上げた。現在、地域と連携した食育活動を展開しており、体制が整いしたい連盟への加入も考えている。

ア「学校家庭クラブ活動」の総指導時間

- ① 0～1単位時間
- ② 2～5単位時間
- ③ 6～10単位時間
- ④ 11～15単位時間
- ⑤ 16単位時間以上

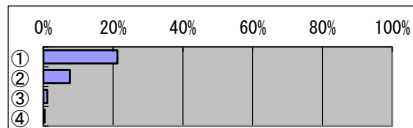
①	131	49.6%
②	25	9.5%
③	6	2.3%
④	2	0.8%
⑤	10	3.8%



イ「学校家庭クラブ活動」の授業中の年間指導時間(配当単位時間)

- ① 0～1単位時間
- ② 2～5単位時間
- ③ 6～10単位時間
- ④ 11単位時間以上

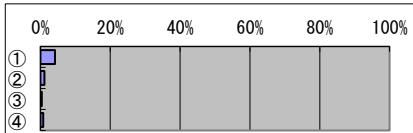
①	56	21.2%
②	20	7.6%
③	3	1.1%
④	1	0.4%



ウ「学校家庭クラブ活動」の長期休業中の年間指導時間

- ① 0～1単位時間
- ② 2～5単位時間
- ③ 6～10単位時間
- ④ 11単位時間以上

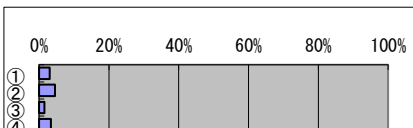
①	11	4.2%
②	3	1.1%
③	1	0.4%
④	2	0.8%



エ「学校家庭クラブ活動」の放課後の年間指導時間

- ① 0～1単位時間
- ② 2～5単位時間
- ③ 6～10単位時間
- ④ 11単位時間以上

①	8	3.0%
②	12	4.5%
③	4	1.5%
④	9	3.4%



【結果】

- (a)「学校家庭クラブ活動」の指導の場面として、約3割が授業中(29.9%)と回答し、全体の5割以上の実施率である「ホームプロジェクト」に比べ、「学校家庭クラブ活動」の授業中実施率が低い。
 (b)その他の回答も多く(39.0%)、そのうち8割以上の学校(学科)で今年度未実施という回答であった。(83.5%)
 (c)「ホームプロジェクト」に比べ、放課後を活用して実施している割合が高い。(11.0%)
 (d)「学校家庭クラブ活動」の指導時間については、約半数の学校が、0～1単位時間という回答であった(49.6%)。

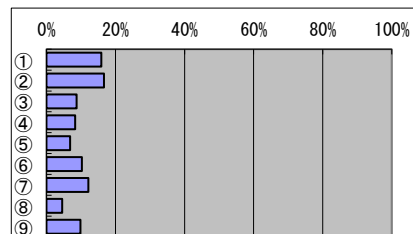
【分析・考察】

- (a)「学校家庭クラブ活動」の実施率より「ホームプロジェクト」の実施率の高い理由としては、長期休業中を活用するなどして取り組ませたり、活動の評価についても個人評価しやすいなどの実施上の取り組みやすさがあると思われる。
 (b)「家庭クラブ連盟」に未加盟なため「学校家庭クラブ活動」を実施していないという回答もあり、加盟に関わらず必修事項であるということが十分に理解されていない状況にある。
 (c)特に、「家庭基礎」においては、単位数が少ないので、ホームルーム活動や生徒会活動、学校行事、「総合的な学習の時間」など、学校全体の教育活動と関連を図るなど、効果的な指導が必要である。
 (d)地域との連携を図る上で有効であると認識されており、現在、地域と連携した食育活動を展開しており、体制が整いしだい連盟への加入も考えているという頼もしい回答もあった。

(6)「学校家庭クラブ活動」を指導した中で、特に教育的効果があったと思われるもの(3つまで)

- ① 生活(家庭)を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた。
- ② 地域や社会を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた。
- ③ 生活(家庭)を改善する力や創意工夫する力が身に付いた。
- ④ 学校生活や地域社会を改善しようとする実践的態度が身に付いた。
- ⑤ リーダー性や積極性が身に付いた。(発揮している)
- ⑥ 協調性(協働性)が身に付いた。(発揮している)
- ⑦ コミュニケーション能力が身に付いた。(向上した)
- ⑧ 発表力(表現力)やまとめる力が身に付いた。(発揮している)
- ⑨ その他

①	42	15.9%
②	44	16.7%
③	23	8.7%
④	22	8.3%
⑤	18	6.8%
⑥	27	10.2%
⑦	32	12.1%
⑧	12	4.5%
⑨	26	9.8%



その他⑨の記述：・今年度まだ実施していない・食(調理等)に関する興味関心を持ち、実践しようとする態度が身につくにつつまある。・自分の住む地域の問題点を考えることができた。・本校は学校家庭クラブ連盟に3年前に加入し、その都度希望者がお菓子講習会に参加するという形で行っている。部活動と平行して参加している生徒も多いため、参加するメンバーも毎回異なる。発表を行えるような活動はしていない状況である。・指導時間が多くないこともあり特に効果を感じていない。

【結果】

- (a)回答が得られた中では、「地域や社会を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた」(16.7%)、「生活(家庭)を見直す力(課題を発見する力)が身に付いた」(15.9%)という割合が比較的高かった。
 (b)次に、「コミュニケーション能力の向上」(12.1%)や「協調性(協働性)が身に付いた」(10.2%)という割合も比較的高かった。
 (c)回答がされていない「その他」として回答されているが、実施例や内容の紹介にとどまっている、また指導時間が多くないこともあり、特に効果を感じていないという記載もあった。

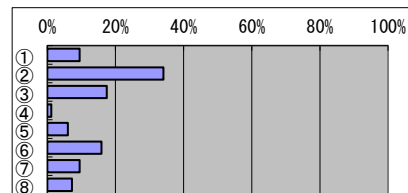
【分析・考察】

- (a)学習指導要領解説には、家庭科の授業の一環として、計画、立案、参加させること、と表記され、すべての活動を授業中に実施しなければならない、もしくは放課後等に生徒全員が参加しなければならないなど、と解釈されているのではないかと懸念される。
 (b)授業時間と放課後等の授業時間以外の他の時間を組み合わせて実施するなど弾力的に取り組まなければ、十分な活動が展開できず、教育効果は得られにくくなると思われる。
 (c)「ホームプロジェクト」と同様に、生徒の汎用的能力や実践的態度を育成するアクティブラーニング型の授業形態であること、各校で実施している地域との連携活動やボランティア活動などへの参加などに関連させ実施することが可能であることなど、周知し、活動取組への理解を深める必要がある。
 (d)実施していないことに対して、一から新たに始めるよう働きかけるというよりも、今、実践している様々な教育活動に対して、視点を変え見直し「学校家庭クラブ活動」として関連させ取り込んでいくことが効果的と考える。

(7) 「学校家庭クラブ活動」を指導した中で、特に問題と捉えているもの(全て選択)

- ① 指導の手順や方法が分からない面がある。
- ② 生徒の学習時間・活動時間の確保が難しい。
- ③ 指導に伴う時間(教員側)の確保が難しい。
- ④ 保護者や地域の方々の理解や協力が得られにくい。
- ⑤ 校内における他教科や他教員の理解や協力が得られにくい。
- ⑥ 生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動にすることが難しい。
- ⑦ 指導や活動に関わる費用の捻出に苦慮している。
- ⑧ その他

①	25	9.5%
②	90	34.1%
③	46	17.4%
④	3	1.1%
⑤	16	6.1%
⑥	42	15.9%
⑦	25	9.5%
⑧	19	7.2%



その他⑧の記述: ・家庭科の専任教諭がいなく、指導が困難である。 ・3年生で家庭基礎を履修する生徒たちが、2年生の選択授業での実施のため、授業との関連がはかれない。また、部活動ではなく、放課後の活動もほぼ行えないため、活動の実践は難しい。 ・加盟校減少に伴い、交流機会も減少しているのが残念。連盟に加盟して活動を発展させてたくても、金銭的理由(会費や大会等旅費の支出方法)から困難な学校もあるようだ。 ・指導教員の育成も必要。 ・農業(水産、商業)高校のため、農業(水産、商業)クラブ活動とのバランスや困難さ。 ・組織を作ることにはかなり労力が必要です。さまざまな行事等を通して授業で学んだことを関連させることで充分かと思っています。

【結果】

(a)回答が得られた中では、特に問題と捉えている理由として、生徒の学習時間・活動時間の確保が難しい(34.1%)が最も割合が高く、また教員側の指導に伴う時間の確保が難しい(17.4%)という回答の割合が高く、指導に当てる時間の確保ができない、時間の余裕がないという回答の割合が「ホームプロジェクト」の問題点と同様に高かった。

(b)また「ホームプロジェクト」の問題点と同様に、生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動にすることが難しい(15.9%)という回答も割合として高かった。

(c)指導の手順や方法が分からない面がある(9.5%)と回答した割合も、「ホームプロジェクト」と同様に約1割の教員からの回答があった。

【分析・考察】

(a)会費や大会参加旅費についての記載があるように、「学校家庭クラブ活動」と「学校家庭クラブ連盟加盟」が切り離されていない現状がある。

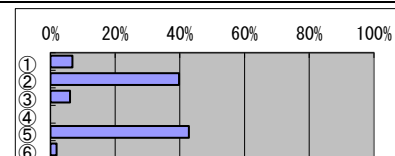
(b)「ホームプロジェクト」と同様、年度当初からシラバスへ計画的に「ホームプロジェクト」同様、位置付ける必要がある。

(c)「ホームプロジェクト」と同様に具体的な指導方法についての研修の機会を設けたり、効率的に実施している実践事例の提示や、自校でも活用しやすいワークシートや評価シート等の指導資料など提供などが必要である。

(8) 「学校家庭クラブ連盟」の加盟の有無

- ① 加入している。
- ② 以前から加入していない。
- ③ 以前は加入していたが、現在は加入していない。
- ④ 以前については不明、現在は加入している。
- ⑤ 以前については不明、現在は加入していない。
- ⑥ その他

①	18	6.8%
②	105	39.8%
③	16	6.1%
④	0	0.0%
⑤	113	42.8%
⑥	5	1.9%



その他⑥の記述: ・加入の有無も不明(3校)

【結果】

(a)以前については不明、現在は加入していない(42.8%)、以前から加入していない(39.8%)との回答の割合が高く、以前は加入していたが、現在は加入していない(6.1%)も合わせると約9割にものぼる。

【分析・考察】

(a)多くの学校が加入できる学校家庭クラブ連盟の在り方について、意見を集約し、工夫改善していく必要がある。

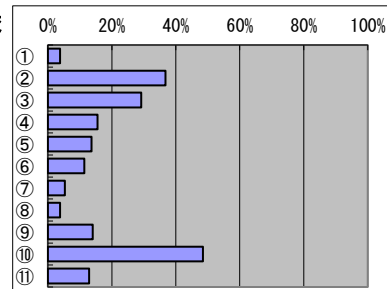
(b)学校家庭クラブ連盟への加入は少人数でも可能であり興味・関心のある生徒からスタートし、様々な活動に参加させていくことが可能であることを周知する必要がある。

(c)生徒が学習成果を発揮でき、その成果発表の場が全国大会へつながっていることにより生徒の取組への意欲高揚や自信を持たせることにもなり、そうした観点からは大変有意義な組織である。

(9) 「学校家庭クラブ連盟」に加入できない理由(全て選択) * 上記(8)において、②、③、⑤と回答した学校

- ① 校内の管理職や教職員の理解や協力が得られないため。
- ② 校務が多忙で、指導時間がなかったため。
- ③ 生徒からの連盟会費の徴収が難しいため。
- ④ 役員生徒や一部の生徒の活動になりがちとなるため。
- ⑤ 連盟の行事等に合わせることもあり、拘束されがちであるため。
- ⑥ 各活動について教員が主体となりがちで、生徒の主体的な活動に
- ⑦ 指導方法が分からなかったため。
- ⑧ 加入の方法や手順が分からなかったため
- ⑨ 加入することのメリットが特に感じられないため。
- ⑩ 部活動や生徒会活動等と競合し、指導者も生徒も活動時間をつくりだすのが難しいため。
- ⑪ その他

①	10	3.8%
②	97	36.7%
③	77	29.2%
④	41	15.5%
⑤	36	13.6%
⑥	30	11.4%
⑦	14	5.3%
⑧	10	3.8%
⑨	37	14.0%
⑩	128	48.5%
⑪	34	12.9%



その他⑪の記述: ・専任教諭の配置がないため ・通信制、夜間定時制、単位制など学校事情のため ・農業(工業・商業・水産)クラブ活動で、学科クラブ活動を学ぶため ・家庭科教員がやらないため ・部活動以外にも講習や検定対策等が組み込まれているため ・どのような組織で、どのような拘束力が生じるのかなど、具体的な内容が把握できないため。 ・生活困窮者の家庭が多く活動費等徴収が困難

【結果】

(a)部活動や生徒会活動等と競合し、指導者も生徒も活動時間をつくりだすのが難しいためという回答の割合が最も高い。(48.5%)

(b)次に校務が多忙で、指導時間がなかったため(36.7%)、生徒からの連盟会費の徴収が難しいため(29.2%)という回答の割合が高い。

【分析・考察】

(a)未加入の理由として、生徒が部活動や生徒会活動、放課後講習等、生徒も指導者ともに時間の確保が難しくなっているということが最大の理由として挙げられる。

(b)活動を充実させるために放課後の指導や、週休日のなどの指導が必要となり家庭科教員への負担増となったり、会費納入、大会参加に係る旅費等の捻出など、様々な課題があるが、生徒の汎用的な能力や実践的態度の育成を図る観点から大変有効であり、校内の体制について条件整備を進めていく必要がある。

4 実践例

生徒が主体となり問題を発見して解決していくなど能動的な学習の指導や取組の実践例があれば、ご記入

【主に食分野に関連】

・アフリカから滝川市に研修に来ている外国人を講師に調理実習を実施し異文化の食生活について学んだ後、地域の（日本の）食材について比較調査し発表させた。
・地元の米、ラズベリーを使って酵母を培養し、それを使ってパンを作る課題研究を行った。
・有害動物のエゾシカを活用した商品開発及びエゾシカの交通事故の防止の啓発。
・英語との共同授業で、日本の食文化を調べ、英語のレシピのおせち料理を作り英語で説明しながらALTにふるまう。
・学校設定科目「食物」において、各都道府県の食文化についての調べ学習(発表・校内掲示)など。
・グループで自分たちの食生活に関する問題点を1つ取り上げ、原因と具体的な改善策を話し合いして、発表し全体で共有する。
・自分の食生活を見直す、バランスの良い食事計画、スポーツ選手に向けた食事、エコクッキング、ヘルシーおやつ、健康的な生活
・健康に課題のある身近な人へのお弁当作成。(フードデザイン)
・嫌いな食べ物をおいしく食べられるメニューの考案と作成と提供。(フードデザイン)
・美瑛町において、地元の食材を用いたPR活動をさまざまな関係機関と連携して行っている。
・地域の特産であるそばを使った加工品の開発や廃棄そばを飼料とした豚の肉質向上及び加工品開発
・一日の献立を見直し、栄養のバランス・簡単な調理・エコクッキングの観点から自ら考え献立を組み立てる。1食分を調理し、反省・改善策を考える。
・本校の生徒の中には、給食を摂らない生徒もあり、日常的に食生活のみだれが生じている。授業の中で少しでも関心を持つよう給食の献立に、自分の希望が叶えられるよう献立作成を指導し、給食担当者と相談をしながら食育について考えさせている。
・冬季休業期間に「食生活」に関する身近な課題をテーマに課題解決のための調査・研究を行い、レポートにまとめ、家族の評価をもらう宿題を課す。時間が確保できれば、授業中に発表会を行う。
・家庭クラブ活動の一環として、2年生家庭基礎履修生と3年生フードデザイン履修生の代表者が地域の食材をつかった創作料理を考え、「高校生チャレンジグルメコンテスト」への出場を目指す。その中で、地域食材について・接客・商品アピールについて地域のお祭りなどでの販売から接客や開発商品についての問題を抽出し、それについて解決策を考え、コンテストや管内の高校が集まるハイスchoolフェスに出場する。

【主に衣分野に関連】

・被服実習では、生徒一人が工程終える毎に点検し、生徒と教師が共に問題を理解し、解決に向けて取り組むことが出来るよう指導している。
・冷感性対策、リサイクル、リメイクファッション
・学習して身に付けた手芸の基礎技術を活用した作品づくり、学校祭Tシャツのデザイン画(2年)、テーマに合わせた衣装デザインを考える、色合わせ(似合う色を探す)、自分でデザインした絞り染め大判風呂敷づくり(3年)
・被服実習でハーフパンツを作る際、ハーフパンツの型紙はどのような形かを想像させている。グループで紙を使いながら試行錯誤しながら、原型や作る手順について考えているので、実際の型紙、手順を示すととても興味を持っていた。

【主に住分野に関連】

・住居分野の学習は、自分の生活設計における住居設計を試み、また実際の生活居住地域環境について、問題点を取り上げ、改善策などを具体的に検討した。特に3年次の学習では社会人と生活する自分の生活がイメージしやすいため、気づきや提案が多い。ただし、実践的には費用がかかるものであるためグループ討議のみ行っている。
・バリアフリーな暮らし方についてなど
・自分の住宅の危険箇所について考え、低予算で解決する方法についてみんなで考える。
・

【主に保育分野に関連】

・年間5回(15時間)の保育園実習を通し、園児の身体的・精神的成長にあった玩具を考案。(子どもの発達と保育)
・保育園実習で生徒が受け持つ園児に起こる問題について、仮想学年団会議を開き問題解決に取り組む(子どもの発達と保育)
・たまご赤ちゃんの疑似体験学習
・生徒同士で絵本の読み聞かせをしたり、子供服を実際に触ってみたり、離乳食の食べ比べをするなど、実際に体験をし、その中でそれらの目的や役割などを生徒が見つけ出すようにしている。
・地域の保育所との交流、保育所児への食育活動
・保育所実習(保育計画を作成し、先生役を2時間行う)・デイサービス訪問(レクリエーションを企画し実践する)

【主に異世代交流に関連】

・社会の高齢化が進んでいるので、地域の高齢者に高校生が貢献できること、という視点で課題を見つけると、活動しやすい。(食事・健康・予防など)
・異年齢交流(グループホーム訪問に向け、グループでレクリエーションを考えて、実践する)

【主に生活設計、ライフプランに関連】

・一人暮らしの設計(自立に向けた住居選択の実習)・調理実習・被服実習など
・ライフプラン作成とその課題についてのペアワーク

【分野を横断してもしくは総合的に取り組んでいるもの】

・家庭科の時間が豊富にあるので、教科内容を検討しながら、生徒の状況をふまえて、グループ活動や、ワークショップなどを少しずつ取り入れています。ワークショップでは、講師の方を招いての活動になるので、生徒も普段とはちがった一面がみられるので、積極的に取り入れていきたい。
・～「生活レベルUp新聞」製作とプレゼンテーション～身近な新聞の情報から私たちの生活を取り巻く問題を見つけ、改善に向けて調査し記事としてまとめ発表する取り組み。家庭科の8つのテーマを班ごとに振り分け、5名の班員が互いに持ち寄った新聞記事について意見交換する中で自分の考えを深め、調べ学習に発展させた後、記事としてまとめあげたものをクラス内で発表し合うといったもの。
・新聞を読み、気になった記事についてまとめ、グループで発表会をしている。発表について班員が評価をし、人に自分の意見を分かりやすく伝えるということについてどうすればさらによくなるかを考えさせている。回数を重ねるうちに社会で起こっていることに対しての意見をもつこと、自分の意見を分かりやすく人に伝えることができるかを考えて、上達が見られるようになった。
・アフリカから滝川市に研修に来ている外国人を講師に調理実習を実施し異文化の食生活について学んだ後、地域の（日本の）食材について比較調査し発表させた。(再掲)
・有害動物のエゾシカを活用した商品開発及びエゾシカの交通事故の防止の啓発。(再掲)
・地域の保育所との交流、保育所児への食育活動(再掲)
・防災についての取り組み
・礼状書き(手書き)、茶道体験学習

【他教科との連携、もしくは他教科の取組】

・理科との共同授業で、災害時を念頭にいたエコクッキング（食材だけでなく燃料などすべてのものの活用を見直す）
・学校家庭クラブ、家庭科独自の取り組みではないが、本校の総合的な学習の時間において、「探求基礎1・2・3」として、3年間で探求するための態度や能力を身につけることを目標としたカリキュラムを実践している。
・理数科の生徒においては、「課題研究」で取り組んでいる。理科が中心となり指導しているが、食品実験を実施した年は、協同して指導にあたった。
・英語との共同授業で、日本の食文化を調べ、英語のレシピのおせち料理を作り英語で説明しながらALTにふるまう。（再掲）
・家庭科ではないが、他の教科で「アクティブラーニング」を実施して、生徒の興味関心を高め、学習効果が向上している。企業とのコラボで「商品開発」や「ICT」を活用した取組をおこない、思考力・表現力・判断力の向上が確認されている。
・アフリカから滝川市に研修に来ている外国人を講師に調理実習を実施し異文化の食生活について学んだ後、地域の（日本の）食材について比較調査し発表させた。（再掲）

【主に地域との連携、まちづくりへの関連】

・地元の米、ラズベリーを使って酵母を培養し、それを使ってパンを作る課題研究を行った。（再掲）
・有害動物のエゾシカを活用した商品開発及びエゾシカの交通事故の防止の啓発。（再掲）
・街の中のバリアフリー化されている場所を調べ、バリアフリーマップを作成する。
・美瑛町において、地元の食材を用いたPR活動をさまざまな関係機関と連携して行っている。（再掲）
・地域の特産であるそばを使った加工品の開発や廃棄そばを飼料とした豚の肉質向上及び加工品開発（再掲）
・家庭クラブ活動の一環として、2年生家庭基礎履修生と3年生フードデザイン履修生の代表者が地域の食材をつかった創作料理を考え、「高校生チャレンジグルメコンテスト」への出場を目指す。その中で、地域食材について・接客・商品アピールについて地域のお祭りなどでの販売から接客や開発商品についての問題を抽出し、それについて解決策を考え、コンテストや管内の高校が集まるハイスchoolフェスに出場する。（再掲）

【学習（指導）方法の工夫など】

・ディベートまで発展しているとは言い難いが、ペアワークやグループワークを行い、話し合う・学び合う・助け合うを心がけている。
・グループで写真を読み取り、その写真が何を表しているか、何が問題なのかを話し合ったりして内容に入るととても興味をもって授業に参加している。
・家庭科の時間が豊富にあるので、教科内容を検討しながら、生徒の状況をふまえて、グループ活動や、ワークショップなどを少しずつ取り入れています。ワークショップでは、講師の方を招いての活動になるので、生徒も普段とはちがった一面がみられるので、積極的に取り入れていきたい。（再掲）
・～「生活レベルUp新聞」製作とプレゼンテーション～身近な新聞の情報から私たちの生活を取り巻く問題を見つけ、改善に向けて調査し記事としてまとめ発表する取り組み。家庭科の8つのテーマを班ごとに振り分け、5名の班員が互いに持ち寄った新聞記事について意見交換する中で自分の考えを深め、調べ学習に発展させた後、記事としてまとめあげたものをクラス内で発表し合うといったもの。（再掲）
・新聞を読み、気になった記事についてまとめ、グループで発表会をしている。発表について班員が評価をし、人に自分の意見を分かりやすく伝えるということについてどうすればさらによくなるかを考えさせている。回数を重ねるうちに社会で起こっていることに対しての意見をもつこと、自分の意見を分かりやすく人に伝えることができるかを考えて、上達が見られるようになった。（再掲）
・学校設定科目「食物」において、各都道府県の食文化についての調べ学習（発表・校内掲示）など。（再掲）
・グループで自分たちの食生活に関する問題点を1つ取り上げ、原因と具体的な改善策を話し合いして、発表し全体で共有する。（再掲）
・冬季休業期間に「食生活」に関する身近な課題をテーマに課題解決のための調査・研究を行い、レポートにまとめ、家族の評価をもらう宿題を課す。時間が確保できれば、授業中に発表会を行う。（再掲）
・家庭クラブ活動の一環として、2年生家庭基礎履修生と3年生フードデザイン履修生の代表者が地域の食材をつかった創作料理を考え、「高校生チャレンジグルメコンテスト」への出場を目指す。その中で、地域食材について・接客・商品アピールについて地域のお祭りなどでの販売から接客や開発商品についての問題を抽出し、それについて解決策を考え、コンテストや管内の高校が集まるハイスchoolフェスに出場する。（再掲）

5 課題など

【課題など】

・主体となって問題を発見して解決していく能動的な学習は現時点の本校の生徒ではとても難しいと考えている。家庭科の総合的な基礎力の育成を重点的に実施しなくては授業に成り立たないためかなり苦悩している。

【分析・考察】

(a)地元の農産物等を使った創作料理や商品開発、地元の農産物等の消費拡大イベント等で販売から接客・商品アピールを行うなど地域との連携、自分の食生活の改善や給食献立作成並びに担当者との懇談などの食育活動、保育所との交流・グループホーム訪問などの異年齢交流、他教科との連携なども含め、衣食住、生活に関わる様々な分野にわたって実践例が挙げられた。今、まさに求められている地域創生、まちおこしという観点から、または特色ある学校づくりという観点からも学校経営上、大きく貢献しており高く評価すべき活動が多々、挙げられた。
(b)学習方法の工夫に焦点を当てると、生徒の実態を踏まえたペアワークやグループワークなど、ワークショップや発表、身近な新聞の情報から私たちの生活を取り巻く問題を見つけ、改善に向けて調査し記事としてまとめて発表する取組など、言語活動の充実や教師が主導する授業から少しずつ生徒主体の授業にシフトしていくヒントとなる様々な実践例も見られた。
(c)記載された実践例をみると、まさにホームプロジェクトといえるもの、またはあー工夫すればホームプロジェクト活動として取り上げられるものなどあった。他にも、この実践例は、そのまま学校家庭クラブ活動として取り組めるのでは、思えるものもいくつかあった。
(d)家庭クラブ活動の一環として、2年生家庭基礎履修生と3年生フードデザイン履修生の代表者が地域の食材をつかった創作料理を考え、「高校生チャレンジグルメコンテスト」への出場を目指すなどという活動は、授業における学習の成果を全国に広がる場で、発表したり競ったりする機会として、学校家庭クラブ活動を大いに活用している取組例である。
(e)基礎学力に課題がある生徒については、習得した知識や技術の定着を図るためにも、生徒の実態に応じて、授業内容の振り返りや生徒同士で学んだことを確認し合う活動などを通して、書く・話す・グループ内で発表するといった場面を意図的に取り入れるなど、ステップを踏ませて取り組ませるよう工夫する必要がある。

※ 貴重な実践例や課題などを寄せていただき、ありがとうございました。